

---

# 円卓の騎士勲章

z e t s u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

円卓の騎士勲章

### 【Nコード】

N54880

### 【作者名】

z e t s u

### 【あらすじ】

第二次世界大戦中、最強のエースである『空の魔王』ルーデル。彼の為に新たに用意された勲章は円卓の騎士になぞらえ、12個製造されていた。彼に続く英雄達がこの戦争をどう生き抜くか…今はまだ、誰も知らない。

## 叙勲式典（前書き）

【注意】この作品は第二次世界大戦中のドイツを題材にしたフィクション作品です。どのようなイデオロギー・プロパガンダにも該当しません。「ナチスなんて見たくもない！！」「戦争なんて野蛮な行為は嫌い」…等感じる可能性のある方は戻るボタンを推奨します。

また、時系列などがバラバラである場合も御座いますが、フィクション故ご容赦ください。（…単に勉強不足だけです）

## 叙勲式典

### プロローグ

彼は総統の前に立っていた。周りには、ナチス党員や幹部・将官クルスの軍人が整列している。

その式典は、彼の為だけに用意された物であった。今回彼に与えられる勲章は、ドイツ軍史上初の快挙である彼の戦果に対して贈られる、最高位のものであった。

「ハンス・ウルリッヒ・ルーデル、貴官の輝かしい戦歴を称え、私アドルフ・ヒトラーの名においてここに勲章を与えるものとする……」総統がよく通る声で宣言しようとする。が、彼：ルーデルは総統の前に手を翳した。

「敬愛する総統閣下よ、貴方がもう二度と私に地上勤務を命じないと誓って頂けるのならば、小官はその勲章を受け取りましょう。」ルーデルは丁寧な口調で、そして強い意志を持った瞳を総統に向け、言い放った。

ざわめく式典会場。そしてその言葉を聞き、剣呑な表情を浮かべるSS隊員。

だが、ヒトラーは鼻白んだ様子もなく語りかける。

「ルーデル、私は貴官を失うのが怖いのだ。貴官の戦果はおそらく世界史上最高の物で間違いない。これからは貴官には、他のパイロットにその貴重な技量を伝えていく重要な任務がある。貴官が戦死したら、我がドイツの空には二度と光が射すこともなくなってしまうだろう……！」

ルーデルは困った顔をし、空を仰いだ。

「そうは仰られますが、閣下。小官は別段変った事をしている……という自覚も持っておりません。小官は、今は亡き上官であるステーン大尉から教えられたごく基本的な技術しか持っており、後進に

教えられる事などごく僅かであります。それよりは、我が祖国ドイツの為に小官自身が闘いたいです。そして、小官の他にも祖国ドイツの為に立つ若者がきつと現れることでしょう。」

その男、ルーデルは『空の魔王』と呼ばれる男であった。

## 叙勲式典（後書き）

ちなみに、用語解説（？）としまして…

小官〓私（一人称）

ルーデル〓実在のエースパイロット。アンサイクロペディアに嘘をつかせなかった唯一の男。

ヒトラー〓言わずと知れた独裁者。

SS隊〓ヒトラーの親衛隊。そのトップはヒムラー。

## スターリングレード　く着任く

コンラート・フォン・ネールバウアー伍長を乗せた輸送列車は補給拠点へと到着した。

輸送列車を降りた瞬間、刺すような寒さがネールバウアーを襲う。つい半年前まで北アフリカに居た彼にとって、ここはかなり冷える地域のようなだ。

周りを見渡すと、廃墟ばかりが目につく。爆撃の痕、銃痕、煤で汚れたボロボロの建物。スターリングレードはまさに戦場と言える場所であった。

ネールバウアーは他の兵士と共に、軍用のトラックの荷台に詰め込まれ、司令部の置かれた廃墟へと向かう。悪路を走るトラックの荷台は、乗客の不平など嘲笑するように揺れる。

しばらく走ると、ゲートの前で停車する。警備の歩哨が書類を確認しているのが見えた。

また笑うようなトラックの乗り心地を味わっていると、痔持ちになると車内の上等兵がぼやく。

吐く息の白さが体感温度を更に下げながら、トラックはようやく止まった。

司令部は廃墟に置かれていた。戦争前は何かの庁舎であったろう。大きめの建物で、中庭には仮設テントが集まっている。慌ただしく走る衛生兵や、武器の整備をしている兵士が目につく。

ネールバウアー達は司令官室へ出頭する。司令官はフリードリヒ・フォン・パウルス中将である。

秘書に通されたネールバウアー達が最初に目にしたのは、ペットのガチョウに餌をやっている司令官の姿であった。ネールバウアー達に気付いたシュミット参謀長の咳払いで、パウルス司令は振り返っ

た。シュミット参謀長もパウルス司令も、かなりの美形で長身である。

余談ではあるが、パウルス司令が20代の頃は「高貴な殿下」という渾名で女性から嬌声を浴びていたのであった。

パウルス司令は立ち上がり、ネールバウアー達の敬礼に答礼した。

「諸君、よくスターリンググランドへ来た。諸君らはこれからソ連兵と戦ってもらうことになる。ここは少々過酷な環境であるから、気を抜くと長生きはできんぞ。私からは以上だ。」

パウルス司令からの訓示も終わり、彼にはk a r 9 8 kが支給された。そして、ラルス・ニーデルマイヤー少尉の隊への参加命令が下った。

小隊の詰め所となっている仮設テントまで行き、ニーデルマイヤー少尉に着任挨拶をする。

「伍長、君は狙撃は得意かね？」

ネールバウアーは敬礼したまま首を傾げた。

「狙撃：でありますか？」

その質問にニーデルマイヤーは頷き、続けた。

「そうだ。このスターリンググランドでは敵狙撃兵によって我が軍は多大な損害を強いられている。君が司令部でこの小隊の補充要員の命令を受けたのも、先日の戦闘で敵の狙撃兵の待ち伏せによって死者を出してしまったからなのだ。」

ニーデルマイヤーの口調に淀みは無かったが、目の下のクマで彼の疲労が読み取れる。

「私の隊の今後の任務は、その狙撃兵の撃退になってくるだろう。だが、敵の狙撃兵が何人居るか、また潜伏先も装備も、皆目見当がついとらん。情報がないことには撃退はおろか、最悪接敵もままならん。」

そこで少尉はクシャクシャになった煙草に火を点ける。



「…そこでだ。私は隊を2つの分隊に編成し、敵のあぶり出しを実行しようと考えている。私と他数名が囷役として先行し、隊長補佐の曹長と残りの隊員で迂回ルートを採り、敵狙撃兵からの攻撃を受けた際の索敵、可能であれば撃退にかかる。」

ニードルマイヤーはネールバウアーに向き直り、煙草を差し出した。「という訳だが、君は狙撃は得意かね？あと、一服どうだ？」

ネールバウアーは支給されたk a r 9 8 kの点検をしながら悩んでいた。

彼は以前、北アフリカ戦線で歩兵を務めていた。が、それまで彼は銃撃戦の経験はあっても、狙撃主対狙撃主のスナイパー合戦など経験したこともなかったし、敵の補給拠点の制圧が主な任務であった。更に、負傷によって後方送りになった彼は1カ月後の退院の後、このスターリンググランドへ着任したのだが、ここは北アフリカと環境が違いすぎるのである。

「…よし。」

ネールバウアーは貰った煙草を揉み消し、隊長の居るテントへと向かった。

## スターリンググラード 〱 着任〱 (後書き)

スターリンググラード〱旧ソ連の地名。ここで激しい戦闘が行われた。パウルス中将〱実在の人物。北アフリカ戦線のロンメル將軍とは友人同士。ペットのガチヨウを溺愛していた。渾名の件も実話です。

シュミット参謀長〱パウルス司令と結構似ているタイプの冷静な軍人。「諸君、10分間で決断し短い理由をそえよ」が口癖。

kar98k〱旧ドイツ軍の代表的なライフル。ボルトアクション方式(短発銃)

狙撃〱主に身を隠し、敵を狙い撃つ戦法。

狙撃主〱スナイパー。

北アフリカ戦線〱イタリア軍が敗走した結果、ロンメル將軍<sup>ドイツ</sup>の指揮する戦車部隊が進軍する。

## スターリンググラード　　（哨戒）

「すると君は囹役の方を志願する訳か。」

ニーデルマイヤー少尉は淡々と続ける。

「囹役の危険性は索敵役のそれより遥かに増すが、それは理解しているのか？」

ネールバウアーは直立不動で答える。

「小官は狙撃の技能を有してはおりませんし、経験があるのは補給拠点の占拠と歩哨程度であります。今回のような索敵などの隠密作戦は未経験でありますので、少尉殿に同行させて頂きたく愚考する次第であります。」

ニーデルマイヤーは少し考え、質問を変えた。

「君はヴァシリ・ザイツェフを知っているかね？」

ヴァシリ・ザイツェフ、ソ連軍屈指のスナイパーである。ソ連軍の過剰なまでの宣伝で、ある程度誇大化されている可能性も少なくないが、それだけに実力の程は定かではない。

しかし、着任したばかりのネールバウアーに予備知識など無かった。

「いえ、存じておりませんが……」

ニーデルマイヤーは少し思案して、同行の許可を出した。

作戦開始まで数日の期間があり、ネールバウアーはドイツ軍拠点周辺の基本的な地理を把握するための散策をしていた。予定される出撃時と同じ装備、同じ携行品を身につけている。少しでもこの環境に慣れる為の努力である。

スターリンググラードは北アフリカと違って寒く、コートが支給されていたが、小柄な彼には支給されたコートのサイズも少しばかり大きかった。

携えたkarr98kは北アフリカで彼の使っていたGew98に比べて幾分も短く、取り回しも良い。廃墟の多いスターリンググラード

ではこの取り回しがかなり有利に働くだろう。手榴弾も2つ携行している。

作戦のことや新しい上官のことを思案しながら歩いていると、いつの間にか拠点から離れすぎてしまっていた。

ネールバウアーは少し焦りながら拠点の方へ引き返した。

と、早歩きの彼はニーデルマイヤー少尉に貰った煙草を落としてしまふ。ここスターリンググランドでは煙草や酒などの嗜好品は貴重だ。慌てて拾う。

その時、ネールバウアーの後ろの壁が爆ぜた。

ソ連兵の偵察部隊は10人、2人ずつの編成でそれぞれある程度の距離に離れて索敵を行っていた。武器はモシンガン小銃が5丁。10人の部隊で小銃を分けた結果がこの編成である。

ソ連軍は兵員としての物量こそ有利ではあったが、武器や食糧などの物資が不足しがちであった。

偵察兵の一人が何かを発見した。左手を小さく上げて部隊長が気付く。部隊長がその兵士の所へ素早く移動すると、30メートル程先の地点にドイツ兵が一人歩いている。こちらには気づいていない。部隊の全員に指示を出し、他にドイツ兵が居ないか探らせる。結果はノー、どうやら単独行動をとっているようだ。

部隊長はドイツ兵の射殺を命令する。死体から何らかの書類を回収できれば、ドイツ軍の動向が把握できるかもしれない。

「出来るだけ頭を狙え、奴の装備を血で汚すな。一撃で決めろよ。敵に気付かれてはならん。」

部下に命令し、配置につく。

狙いを付けた部下が発砲する瞬間、そのドイツ兵は唐突に屈んだ。失敗である。気付いたドイツ兵はそのまま建物の陰に転がりこむ。

「いかん！！絶対に逃がすな！！！！」

部下に怒鳴り、部隊長は走りだす。

## スターリングレード 〱 哨戒〱 (後書き)

ヴァシリ・ザイツェフ〱実在のソ連軍名スナイパー。映画「スターリングレード」は彼の映画です。

Gew 98〱旧ドイツ軍のライフル。kar 98kはこのライフルの短縮モデル。

手榴弾〱手で投げる爆弾。旧ドイツ軍の手榴弾は円筒形の爆薬入りの筒に柄がついたモデルです。

偵察〱敵が居ないか探ったり、いろいろ調べたりすることです。索敵は敵を探すことですね。

モシンナガン小銃〱旧ソ連の短発銃です。色々なバリエーションが作られたり、フランスやアメリカに一部製造を依頼してたりします。そのせいか、もの凄い数が作られました。こないだイラク戦争の戦場で使われているのが確認されたようですよ。

## スターリングレード　　く潜伏く

ネールバウアーを狙った銃弾は、偶然によって彼の頭蓋を貫き損ねたが、彼の窮地はまだ終わってはいなかった。

身を低くして、廃墟の中を走り回る。敵の人数は不明だが、複数人居るようだ。足音の数が多い。

崩れた壁が人の字に重なり合っている隙間に飛び込み、じっと息を潜める。心臓の鼓動が早鐘のように感じられた。

しばらくは呼吸すら忘れていたネールバウアーだったが、幸運なことに足音は彼の居る隙間の側を通り過ぎた。

ニーデルマイヤー少尉の言っていたスナイパー、ヴァシリ・ザイツエフの噂を先任伍長に詳しく聞いていたので、嫌でも思い出される。頭を上げたら即打ち抜かれるのではないかという恐怖が彼を襲った。（待て待て、奴がもし噂通りの男ならとうに俺は撃たれている。奴ではない。）

深呼吸し、彼は自分の装備を改めて見直した。kar98kが一丁、その予備の弾が30発。kar98kに装着可能な銃剣が一振り。手榴弾が2つに水筒や煙草にライター。後は制服、コート、ヘルメットにブーツ。基地周辺の地図も持っている。

（これでどうかこの場を切り抜けなくては…）

ネールバウアーは必死だった。

（着任早々死んでたまるかつー！）

声に出さずに叫ぶと、音を立てぬように身を起こし、慎重に周囲を見渡す。地図によれば基地までの距離は約3キロメートル。ドイツ軍の占拠している勢力範囲ギリギリの地点である。

ここまで単独で来てしまった自分の迂闊さを呪いつつ、活路を探す。（落ち着け！！まだ手はあるはずだ！！）

ソ連の偵察部隊は見失ったドイツ兵を必死に探していた。ここは前

線より更に奥の地点である。ソ連軍基地までは約20キロメートル。徒歩で来ている彼らは援軍を呼ばれると生還が難しくなる。

「クソッ!!」

部隊長は狙撃に失敗した部下を殴り倒した。

この偵察部隊の今回の任務は敵拠点の強行偵察であった。可能であればドイツ軍司令官の抹殺も任務に入っている。

発見されれば援軍を送られるし、当然警戒も強化されるだろう。任務の危険度は自ずと高くなる。

それに何より部隊長は出撃前、フルシチョフ政治委員と対面し、「作戦の成功を熱望する」との言葉を与えられていた。これはソ連で言うところの「失敗したら命は無い」という警告でもあった。何らかの戦果を挙げるか、重要な情報を持ち帰らなければ、帰ることもままならない。

もし発見出来ねば、完全に手詰まりとなってしまう。

「何をしている!!まだ遠くへは行っていないはずだ!!絶対に探し出せ!!!!!!」

部下の尻に蹴りを入れながら怒鳴り散らす。

ネールバウアーは自分を探しているソ連兵の怒声を聞いていた。ロシア語の意味は分からなかったが、自分を探しているのは間違いないだろう。

とりあえず、声のした方と逆の向きへ移動する。小柄な彼の身体はコンプレックスの種ではあったが、今回のこの状況では有利だった。移動しながら考える。

援軍を呼ぶ手段はないか?付近に見回りの味方が居れば気付いてくれるかもしれない。派手な爆発でも起こせば味方がやってくるだろう。だが、現実問題手榴弾2個しか持ち合わせていない。

戦うとしても、敵の正確な数が分からないし、敵には居場所とはともかく自分一人だということは知られているだろう。そうでなければ攻撃はしにくいはずだ。

突破するか。敵に居場所を知られてない以上、それも手段としては充分可能である。が、下手をすると見つかってしまう。

やり過ごす。あまり派手な動きを取らなければ、見つかる可能性は低くて済む。それにここまで敵が来ているのは大変な問題である。できるだけ敵の正体や目的を探らねばならないだろう。

結局ネールバウアーは敵の探索をかわしながら、ここに留まることに決めたのだった。



## スターリングレード　ゝ潜伏ゝ（後書き）

先任伍長〓先任というのは、簡単に言えば先輩のことです。

強行偵察〓敵がいるのが分かっている地域で、詳しい情報を得るための偵察です。

フルシチョフ政治委員〓ソ連の政治家。現実世界では後に最高指導者となります。

## スターリンググレード　く反撃く

パウルス司令はシャワーを浴びていた。彼は日に二回のシャワーを日課としている。

シャワーを浴びながら、彼は昨日司令部に挨拶に来た伍長の事を思い出していた。

（確か北アフリカ戦線に居たという話だったな…ロンメルは無事だろうが、元気にしているといいが。そういえば手紙で戦利品のゴータールを自慢していたな。生還したら見せてもらおう。）

パウルス司令がそう思っていた頃、ネールバウアー伍長は心臓の鼓動や湧き上がる恐怖心と戦っていた。

そろそろ攻撃を受けて30分は経つだろう。彼にとっても敵にとっても、長い30分であった。

（少し移動するか。）

そう判断し、立ち上がった時彼の頭からヘルメットが…落ちた。

一方ソ連の部隊長は後悔していた。いくら探しても見つからない、これはどうやら取り逃がしたようであるとの結論に至っていたのだった。

周囲の搜索に時間を割きすぎたのが災いしているように思えた。

「貴様らのせいで俺は銃殺刑にされるか敵に殺される!! どうしてくれる!!」

叫びながら狙撃に失敗した部下を小突き回す。

先ほどから部下達は部隊長に怒りの矛先を向けられ、所々負傷していた。狙撃に失敗した部下は既に血だらけになってしまっている。

「部隊長殿!!」

部下の一人に呼ばれ、不機嫌極まりない顔をそちらに向ける。

だが、その部下の報告は彼を狂喜させた。

「物音がしました！！そちらの方向です！！」

ネールバウアーはヘルメットを拾い上げると急いで移動を開始した。金属のヘルメットはなかなか良い音を立ててしまった。最悪である。（クソッ！！ここまでできて！！）

物陰に飛び込み、敵を確認しようと慎重に顔を出す。すると、敵の一人とバツチリ目が合ってしまった。

「あそこだ！！居たぞ！！」

叫んだ部下の指差した方向へ、部隊長は射撃命令を下した。興奮した彼は、当初の作戦を失念してしまっていた。もはやドイツ軍に見つかる危険を避けるという配慮もしていない。隠れていたドイツ兵を仕留めることに熱狂していたのだ。

ネールバウアーは頭を抱え、身体を縮めて銃撃を凌いでいた。少しでも動くと、そこを狙い撃たれる。

だが、動かなければすぐに接近され、回り込まれるだろう。そうなればお終いである。

ネールバウアーは手榴弾のピンを引き抜くと、先程敵が居た辺りに放った。

同時に踊り出て少し離れた物陰まで走る。これは賭けだった。手榴弾が狙った場所に落ちているか。敵が移動していたら、意味は無くなってしまう。

ネールバウアーは振り返ることなく走った。

射撃姿勢を取っていたソ連兵達の少し後ろに何かが落ちた。落ちた物を見たソ連兵は慌ててその場から逃げる。

が、狙撃に失敗した兵士が逃げ遅れた。爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされてしまった。

耳を抑えて身を低くしていたソ連兵が身を起こすと、仲間の一人が

額を撃ち抜かれて卒倒する。

ソ連兵達は一気に混乱してしまつたのであつた。

## スターリングレード　ゝ狙撃ゝ

偵察部隊の狼狽はネールバウアーにとつての幸運であつた。

もともと統制が取れていないうえに、手榴弾の衝撃を至近距離で受けて、仲間を狙い撃たれば並みの人間は恐怖する。そうでなくとも彼らは任務への不安で落ち着いていられなかつただろう。

だが事実として、依然ネールバウアーの不利は覆っていない。敵はまだ8人が存在している。ここは敵の混乱を利用し、離脱すべきだろう。

ネールバウアーは敵を射撃・牽制しながら、退路の目算を立てていた。その時、突如頭を鈍器で殴られたような衝撃が襲う。

飛びそうになる意識、熱い左側頭部。その場に座り込み、そこに手を這わせる。

手を見ると赤い液体が滴っている。

熱さは次第に痛みに変え、彼の口からは声にならない叫びが漏れる。被弾したらしい。

目の前の敵ではない、どこから狙い撃たれたのだ。

ヴァシリ・ザイツェフの指揮する狙撃隊は、先程から散発的に聞こえていた銃声の方へ向かつていた。

銃声が聞こえるということは、味方がいるかもしれない。そしてここはドイツ軍陣地に程近い。銃声を聞きつけてドイツ軍は応援を寄越すだろう。味方の援護をせねばならなかつた。

ヴァシリは部下2人を同行させ、残りのメンバーには撤退時の援護を命じた。退路を確保するのは必要である。傷ついた味方が居れば特に。

慎重に進んでいると、前方にドイツ兵が数人現れた。銃声を聞きつけて偵察に来たのだろう。交戦している敵に合流させてしまうと厄

介だ。

「ニコライ、オットー、ここは僕が食いとめる。君達は戦っている味方を援護してくれ。」

ヴァシリは部下に言うのと、狙撃に使えそうな場所を見繕い、敵を狙撃し始めた。

ニコライとオットーはそれぞれ狙撃銃を抱え、交戦しているであろう味方の元へ急いだ。

と、爆発音が向かっている先から聞こえた。手榴弾を投げたらしい廃墟の中を進んでいくと、50メートル程先に交戦中のドイツ兵が居た。単独で壁に隠れ、銃撃をしている。ニコライはその場に残りそのドイツ兵に狙撃銃の照準を合わせる。

オットーは状況を把握する為に、身を隠しながら移動した。どうやら他に敵は居ないようだ。ドイツ兵が狙っていた辺りを窺い、味方を確認する。数人居るが、応戦している味方は居ない。

（全員負傷しているのか？）

オットーは味方と合流する為に迂回して移動していたが、ドイツ兵の銃撃が止んだ。ニコライがやったようだ。

ニコライは撃った獲物をもう一度確認した。確かに頭部に着弾したが、獲物は生きている。どうやらヘルメットのせいで僅かに弾が逸れたらしい。

「…運の良い奴だ。」

呟いて次弾を装填する。しかしドイツ兵はニコライの位置から死角になる場所へ逃げてしまった。

ニコライはスコープから顔を離し、オットーが味方に合流するのを確認し、移動を始める。

ネールバウアーはいったん隠れて被害を確認した。

痛みに耐えながら、被弾した側頭部を触る。耳が無い…肉も少しえ

ぐれている。

ヘルメットを見ると、弾が貫通している。

（やはり…狙撃か…）

痛みで飛びそうな意識と戦いながら、水筒の水で傷口を洗い流す。制服を脱いで下着で傷口を覆い、ベルトを巻いて固定する。

穴の空いたヘルメットを被り、改めてライフルを抱えた。

（生きて帰れるのか…？）

自問するネールバウアーだったが、答えを出すにはあまりに絶望的な状況であった。

## スターリンググラード　　へ出撃

数時間前、ネールバウアー伍長の自主的な哨戒行動の許可を出したのは、ニーデルマイヤー少尉であった。

彼は今、司令室の前でパウルス司令との面会を求めている。

ニーデルマイヤー少尉が司令室に入った時、パウルス司令はシュミット参謀長と共に、スターリンググラードの勢力図を見ながら何やら話し込んでいた。

スターリンググラードは寒い。この司令室は殺風景も相まって、余計に寒く感じる。

パウルス司令は、敬礼したニーデルマイヤーに気付くと、参謀長との議論を打ち切り、ニーデルマイヤーに向き直り答礼をする。

「何か報告かね。」

パウルス司令の問いかけに、ニーデルマイヤーは背筋を伸ばし答える。

「我が隊に昨日着任した伍長が行方不明になっております。」

ニーデルマイヤーの報告に怪訝な顔をするパウルス司令。ニーデルマイヤーは状況をかいつまんで説明し、搜索の許可を求めた。

「しかし、それだけでは人員を割く理由にはならん。話がそれだけならば、下がりたまえ。」

パウルス司令がそう告げた時、司令室に伝令が駆け込んで来た。

敬礼を済ませると、息を切らしながら報告する。

「敵襲です！！ここから約3キロの地点、付近を哨戒していた隊が消息を絶ちました！！」

シュミット参謀長が伝令に詳細を問う。

「その付近で散発的な銃声や爆発音がしていたようです。その地点を確認するという報告を最後に、無線の応答が無くなりました。」

慌てていた伝令も、冷静な司令や参謀長の姿を見て落ち着いた報告をする。



パウルス司令は、まだその場に残っていたニーデルマイヤー少尉に命令した。

「少尉、今すぐ出撃したまえ。車両を一台使用することを許可する。件の伍長も拾ってくるといい。」

ニーデルマイヤーは敬礼し、退出した。

廊下で待機していた曹長は、ニーデルマイヤーの少し後ろを付いて来る。

「命令が下った。皆を集め、出撃の用意をしろ、曹長。」

ニーデルマイヤーは必要な装備を挙げ、隊員に最低限必要な情報を簡潔に伝える。

「了解しました、隊長。しかし、問題は果たして伍長はその場に居るのか、ということになりますね。」

「大丈夫だ。今日はあの地点への出撃は無かった。偵察部隊も含めてな。」

曹長の問題提起は至極当然の疑問からであるが、ニーデルマイヤーには確信があった。

「あそこで戦闘が起きているということは、行動予定に無い味方が居たということだ。すなわち、ネールバウアー伍長しかおらん。」

曹長は納得し、敬礼した。去り際、

「生きているならば、なるべく急いで用意を整えますので。」

と、残した。

ニーデルマイヤーは自分のテントに向かいながら考える。

（さすがにそこまでは自信が持てないが…骨は拾ってやるしかないかな（う…））

ニーデルマイヤーが準備を終え、トラックの停めてある場所に行くのと、小隊の全員が既に整列していた。

「諸君、曹長から説明は聞いているな？」

全員が一様に目で返事を返す。

「よろしい、ではこれより味方の支援、並びに迷子の子猫を探しに行く。」

内心全員がため息をついたであろうことは言うまでもない。が、隊長のセンスの悪さは今に始まったことではない。

全員の顔を見まわし、ニーデルマイヤーは頷き、命令した。

「出撃！……！」

## スターリングレード 〽出撃〽（後書き）

拙い文章を毎回書いている俺も大概アレですね…。  
読んでくれる皆さまには感謝の念が絶えないです。

さて、俺は自分のイメージの風景を文章に起こすことがとんでもなく苦手です。

と、言う訳で近々ちよつとこの作品にプラス要素を加えます。

多分すぐお分かり頂けるとお思いますので、改装が済んだ後も『円卓の騎士勲章』をどうかよろしくお願いします。

## スターリンググレード　く忘我く

ニコライとオットーは、ヴァシリから狙撃技術を伝えられた数少ない兵士である。

その彼らは今、偵察部隊の隊長と話をしていた。

「隊長殿、見たところかなり手こずっていたようだな。」

先に合流し、偵察部隊の治療を進めていたオットーが言う。

「我々は奇襲を受けたのだ。敵を討ち減らしはしたが、損害も多かった。」

隊長の返答は、もちろん出鱈目である。見栄というよりは、自分の虐待行為を隠す為であろうが。

ニコライは自分が仕留め損ない、未だ近くに潜伏しているであろう敵に思いを馳せていた。

（味方を討ち減らされながらも戦うとは…是非味方にしておきたい敵ではあるな。）

完全な誤解ではあるが、少なくとも敵はまだ生きている。

偵察部隊は体勢を立て直し、取り敢えずヴァシリの隊へ合流を始める。

ニコライとオットーは、少し離れた場所から索敵と援護をする為散開した。

その頃、ネールバウアーは自分の状況を再度確認していた。

出血は大分落ち着いた。血が乾いて固まったおかげだろう。地図にも血が付いてしまっているが、まだ読める。というか、大幅な移動はしていないので、今は必要無い。

銃には異常は無い。ボルトもちゃんと解放出来る。銃に攻撃を受けただけでは無かったが、武器の点検をするかしないかでは大きな差が出る。

残りの弾は17発。牽制に少々使いすぎたか。援軍が来るかは分らないが、生き延びる為には一発一発を丁寧に使う必要がある。手榴弾は残り一発。なるべく敵が密集している局面で使わねばならない。

ネールバウアーは銃に弾を込め、ボルトを戻し、初弾を装填する。慎重に隠れ場所から身を出し、周囲を確認する。すると、近くに先程交戦していた敵らしきソ連兵士達を発見した。

狙撃兵の存在は恐ろしかったが、先程追い回された怒りが勝った。気がつくともネールバウアーは引き金を引いていた。

崩れ落ちる最後尾の敵。気付いた残りの敵がこちらの方角を向いて警戒する。が、ネールバウアーは既に移動を始めていた。

ネールバウアー自身は知る由も無かったが、彼の今とっている一撃離脱戦法は、狙撃兵の戦法そのものだった。

オットーは先程の偵察部隊長の話に疑問を感じていた。部隊長が話をしている間、隊員の表情に怒りのような、恐怖のようなものが混ざっていたからである。それはとても大勢の敵を撃ち減らす勇猛な戦いをした兵の顔ではなかったのだ。

それゆえ彼は部隊長を好きになれなかった。同時に、少数の敵に混乱する偵察兵達が嫌いであった。

彼はニコライに偵察部隊を援護する策を提案した。それは偵察部隊を囷にできる策でもある。結果的にニコライはその提案に乗った。そして敵も、オットーの策に嵌ったと言えよう。

一方ニコライは、予想通り敵が動き出したことに満足していた。銃のスコープで銃声のした辺りを探る。位置的に彼が一番近い。仕留めることができる可能性も、彼が一番高いだろう。

次こそは仕留める。逸る気持ちを抑えて、慎重に異変を探す。

「どこだ…。どこから撃った？俺ならどこから撃つ…？俺なら次は

どこに移動する?」

思わずつぶやくニコライ。その時背後に気配を感じた。ハツとし、スコープから顔を上げた時に後ろから羽交い締めになれ、首筋にナイフが突きつけられる。

ドイツ語で何かを囁かれる。おそらく、「しゃべるな」や「動くな」と言ったのだろう。

どちらにしてもこうなってしまった以上、どうしようもない。ニコライは覚悟を決めた。首筋の冷たさが熱さに変わり、彼の血が凍った地面に滴る。身体から力が抜け、崩れ落ちる。どうしようもない寒さに襲われた。喉からヒューヒューと喘鳴が零れる。

ニコライは意識が途切れる寸前、彼が先程まで使っていた愛銃を拾い上げる手を見たのだった。

## スターリンググレード　く忘我く（後書き）

どうも、作者の z e t s u です。

資料集めが大変です。（主に武器と実在人物）

とりわけ、映画化された肖像と本人肖像とのギャップに苦しんでたりします。

でも、映画化とかされてない方の資料を集めていると、なんだか昔から知っているような、そんな気がするんです。

旧友なんて言える程知ってるわけじゃないけど…子供の頃、近所に住んでいたお兄さん。そんなイメージが湧いたりします。

今とても不思議な気持ちだったりしてます（笑）

## スターリングレード　　追想

復讐に我を忘れていたネールバウアーは、自分の出した銃声で我に返った。

すぐさま隠れ、移動を始める。

移動している最中に、敵の狙撃兵を発見した。至近距離、集中しているのかこちらには気付いていない。

銃剣を抜き放った時、敵は興奮したように何事かを呟いた。

その瞬間、ネールバウアーは言いようの無い焦燥感に駆られ、敵に飛び付いた。

耳元で囁く。

「赦せよ……」

そして、目をつむって首に銃剣を深く突き刺す。肉の抵抗が手に伝わる。目を開けた時には、敵は崩れ落ちていた。すぐさま敵の狙撃銃に手を伸ばすが、手が震えているせいか、うまく握めない。隠れていた時よりも、心臓の鼓動が大きく感じられた。

彼が狙撃銃を拾うことが出来た時には、彼の敵からは呼吸の音がしなくなっていた。

今まで幾人かの命を奪ってきたネールバウアーだったが、今までで最も間近に敵を感じる殺人であったのだ。

ネールバウアーの心臓の鼓動は収まらなかった。頭の中で、鼓動が何かの足音のように迫ってくる感覚に襲われる。

鼓動は彼の深淵に届くと、足を止め、彼を過去へと誘う。彼は深い追憶の海へと沈んで行った。

彼は孤児であった。血のつながった家族も、財産も、名前すら無かった。

捨て子の彼は、警察に保護され、老夫婦に引き取られた。



彼を引き取った老夫婦は、彼をネールバウアーと名付けた。

家はこの、フランクフルト郊外の小さな家。

彼はここに来て、様々な物を得た。

暖かい食事、寝床、老夫婦からの愛情。

それら全ては、彼にとつての大切な物になった。いつしか彼の存在理由、そのものへと変わっていった。

彼は20歳になり、軍に入隊する。経済的に困窮していたドイツでは、ナチスが台頭し、軍備拡張の道を辿っていた。

彼は決してナチスの同調者では無かったが、ドイツの未来に希望を見いだし、軍人を志したのであった。

彼の22歳の誕生日、彼は久しぶりに帰省していた。

夕食の席、ラジオで、イギリスがドイツに対し宣戦布告を行ったというニュースが流れた。

老夫婦は珍しく固い表情を浮かべ、彼を見た。

彼は席を立ち、軍に戻る支度を始める。

支度を済ませた彼は、老夫婦に挨拶をし、抱き合った後、外に飛び出した。列車はまだあるはずだ。

駅に向かって走りながら彼は呟く、必ず帰ると。

そして決意するのであった。家族を、護ると。

ネールバウアーが自我を取り戻した時、彼の中で蠢動していた鼓動は無くなっていった。彼が自我を失っていたのは数秒であったが、彼の追体験はそのものの長さのように感じられた。

倒れている敵の身体をまさぐる。まだ温かい。

その温もりは、あまり時間が経っていないことを意味する。ネール

バウアーは時間の感覚の希薄さを整理することが出来た。

震えの止まった手で、敵の持っていた狙撃銃を確認する。異常はないようだ。k a r 9 8 kと、方式も同じ。使える。

ネールバウアーは、今しがた敵が自分を探すため覗き込んでいた隙間から、慎重に外を窺う。

## スターリングレード Ⅰ追想Ⅰ（後書き）

更新が大変遅れてしまい申しわけないです。

煮詰まっていたものの、なんとか書き書くことができました。

どうぞ、円卓の騎士勲章をお楽しみください

## スターリングレード　　↓渋滞↓

ニーデルマイヤー小隊は、悪路のスターリングレードを突き進んでいた。

受領したトラックは酷く揺れる。最高速度で爆走している為、路面の凹凸をモロに受ける。

荷台の部下たちの悲鳴や悪態は聞こえないふりをし、ニーデルマイヤーは煙草を吹かしている。

目標地点まであと数百メートル。いきなりタイヤが破裂する。運転手の上等兵がハンドル操作を諦め、ブレーキを思い切り足蹴にする。そうでなくとも、暴れるハンドルとの格闘で辟易していたようだ。

荷台から「下手糞！！」「どこで運転習った！！そこを爆破してやる！！」等々の怒声が飛ぶ。上等兵は首をすくめてニーデルマイヤーの方を見るのであった。

「諸君、タイヤのパンクだ。上等兵はよくやったと思うぞ？」

フロントガラスにしたたか打ちつけた額をさすりながら、ニーデルマイヤーが言った。

「とりあえず早急にタイヤを交換する。早く降りられる者は付近を警戒しろ。奥に座っているメンバーは替えのタイヤを引きずり出して作業にかかれ。」

ニーデルマイヤーの指示で全員が動き始める。

レンチでタイヤのボルトを外し、取り外す。スペアのタイヤを転がしながら運んで、取りつければ完了だ。

「隊長はどいていてください。不器用なんですから。」

曹長にそう告げられ、ニーデルマイヤーはボンネットの方に回り、身体を預ける。煙草に火を点け、部下の作業を覗き込む。

その時ニーデルマイヤーの視界に、異変が映り込む。トラックのバンパーに、貫通した銃痕を発見したのだ。

「伏せる！……！」

思わず叫ぶニーデルマイヤーであつたが、その瞬間、作業にあたつていた隊員の一人が狙撃された。

「全員ヘルメットを着用！！身を伏せて敵を確認しろ！！」

ニーデルマイヤーは命令すると、姿勢を低くし、攻撃を受けた隊員の元へ駆け寄る。大丈夫かとの問いに、隊員は苦笑して掠り傷だと返す。肩口を撃たれているが、弾は貫通しているようだ。

ニーデルマイヤーは自分の着ていたコートを素早く脱ぐと、そのコートで傷口を押さえる。

目標地点まで、かなりの距離があつた。敵が居るとは予想していなかつたニーデルマイヤー小隊は、思わぬ足止めを食うのであつた。

ヴァシリ・ザイツェフは今、若干の焦りを感じていた。救援に向かわせたニコライとオットーが遅すぎるのである。

彼らが手こずっているのか、若しくは既にやられている可能性もある。どちらも考えにくいことではあるが、敵の兵力が予想外に多かつた場合や、敵の力量が彼らよりも勝つていた場合、その可能性もあり得る。

敵の偵察部隊の最後の一人を射殺して、しばらく経つ。そろそろ敵の援軍が駆けつけてもおかしくないだろう。というか来たようだ。索敵をしていたヴァシリのスコープに、こちらに向かって爆走するトラックが映つたのである。

距離は数百メートル。普通の兵士であればとても狙える距離ではなかつたが、彼にとっては狙撃可能な距離である。

タイヤに狙いをつけ、引き金を引く。数秒開けて、着弾。トラック

は停止した。

丁度残弾が無くなる。ヴァシリは余裕を持って弾を装填する。

そして、再度スコープを覗き込む。敵はパンクしたタイヤを交換しているようだ。

作業をしている敵の一人に狙いを付け、引き金を引く。が、突然風向きが変わった。

「あっ…。」

ヴァシリが狙っていた心臓から少々ズレた、肩口に着弾したようだ。他の敵は攻撃に気付き、身を低くしている。

この距離で身を隠す敵を狙うのは、ヴァシリにも少々難易度が高くなってしまった。一応足止めは出来たようだ…。

「まだか？遅すぎるぞ…。」

ヴァシリの零した悪態は、誰にも聞こえない。

## スターリングレード 〱 没滞〱 (後書き)

申しわけないです。かなり遅れてしまいましたorz

私事の山場は越えましたので、これからはもうちょっと頻繁に更新できると思います。

拙い作品ではありますが、これからもどうかよろしくお願いします。

## スターリングレード　く軌道く

ソ連の偵察部隊長は、部下への命令を出せずにいた。

敵がどこから攻撃してくるか分からない状況。助っ人のニコライ・オットーの動きも無い。

この時点でニコライは既に死亡し、オットーも偵察部隊を捨て駒にするつもりだと言う事を彼は知る由も無い。

ネールバウアーは敵の出方を窺っていた。敵から奪った狙撃銃はなかなか良い。スコープが付いているだけでこつも違うものか…。

各所に持ち主の体型に合わせたカスタマイズが施されている。そのせいで、小柄なネールバウアーには若干構えづらい。

ふと、スコープを覗き込むネールバウアーの視界にイメージが飛び込んでくる。

「なんだ…？」

思わず呟き、一旦スコープから顔を離し、目を瞬かせる。

もう一度慎重に覗き込み、敵を見る。…やはり何かのイメージが映る。線のような…弧を描くようなイメージだ。

「…これは弾道のイメージか？」

ネールバウアーは驚いた。スコープとはこんなに高性能なのか？

もちろん、スコープにそんな機能は無い。強いて言うなれば、幻覚の類が一番近いだろう。

しかし、そんな事はつゆ知らぬネールバウアーはひたすらスコープで周囲を見回していた。

オットーはニコライが潜伏した地点をきちんと把握していた。ニコライもまた、オットーの潜伏する場所は把握していただろう。

お互いの死角をカバーするフォーメーションを取るのが、ヴァシリ隊の基本戦術である。



今回も例外ではなかった。少し身を乗り出せば、お互いのひそんでいる姿が見えるだろう。

ふと、オットーはニコライの隠れている場所に目をやる。

オットーの居る位置からは銃口が少し見えるだけだ。あの偽装をしてある銃口、間違い無くニコライの銃だ。

だが、オットーは異変に気付く。あまりに忙しない動きで周囲を見ている。まるで鶏のようだ。

「……？」

オットーはニコライの姿が見える位置に、腹ばいになって移動を始める。

ネールバウアーはしばらくスコープから見える世界を堪能した。

そして、未だに自分を警戒している敵を観察する。団体の中心位置に居る偉そうな男。確か先程ネールバウアーが逃げていた時に支持や怒号を飛ばしていた男だ。

他の敵も不安げに辺りを見回している。

その時、ネールバウアーは奪った銃を試したい衝動に駆られる。どの道、移動する様子もない目の前の敵をどうにかせねば、生還の見込みは無い。

攻撃自体は必要と言える。問題は、タイミングである。今撃って良いものか……それだけが彼の判断を曇らせる疑問である。

数秒の逡巡。結果、ネールバウアーは攻撃を決めた。

狙撃銃を構え直し、スコープを覗く。相変わらずイメージは見えた。狙った男の左胸、イメージもレティクルと寸分違わずそこにたどり着いている。慎重に敵にレティクルを合わせる。ゆっくりと引き金を絞る。

発砲。

撃ちだされた弾は、狙い通りの敵に着弾する。

## スターリングレード 〱軌道〱（後書き）

### 用語解説

レティクル〱銃のスコップやダットサイトなどの光学機器を覗いた時に見えるマーク。漫画とかではよく十字で表現されています。

## お知らせ

投稿していた第12部が、いつの間にやら消えておりました。

さすがにシヨックですし、数か月考えましたが、どうしても続きを書く気になれません。

申し訳ありませんが、円卓の騎士勲章は第11部を以て終了とさせていただきます。

知り合いの絵師さんに、挿絵やキャラの絵とかもお願いしていたのですが、そちらも公開はせずに終了となります。

今までありがとうございました。

気が向いたときに、また別の話を書くやもしれません。

その時は、どうか生温かい目で見守って頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5488o/>

---

円卓の騎士勲章

2011年5月9日07時55分発行